
交わる無限の愛色世界～テイルズオブエクシリア～

月詠輝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交わる無限の愛色世界〜テイルズオブエクシリア〜

【Nコード】

N9119X

【作者名】

月詠輝夜

【あらすじ】

本編のその後のお話です。
時間軸はバラバラ。
子供設定があったり。

同じくサイトと重複投稿。

本編です↓<http://ncode.syosetu.com/n0683x/>

チャットです↓
http://ncode.syosetu.com

永遠の愛を誓おう

一歩、

また一歩、と

わたしは幸せに

近づくんのだ――

あれから、アルフレドからプロポーズを受けて一年と七ヶ月が経った。会えない日は続いたけれど、左手の薬指にある婚約指輪がわたしの寂しさを和らげてくれた。そして今日は――

「ふおお……!! ヴェリテ、めっちゃ綺麗……!!」

「素敵です…！」

「本当にお美しい」

『や、やめてよ、みんな…!!』

「ほら、ヴェリテ。主役が遅れちゃ意味ないでしょ！」

主役、と言われて顔の熱が上がる。今日は、わたしとアルヴィンの結婚式、なのだ。彼の仕事が落ち着いたのが丁度一ヶ月前。それからわたしは再びプロポーズを受けて、今に至るわけで。正直二十歳になる前に結婚するなんて、というか、わたしが結婚するなんて思わなかった。

「アルヴィンさんには勿体ないですね」

「ほんとだよね!! あーもう、だけど羨ましいよ、ヴェリテ！」

みんなはわたしのウェディングドレス姿を見てたくさん褒めてくれる。

『や、あの、でも…やっぱりこれ、ちょっと胸強調されすぎ…っ』

ジュードに手を引っ張られながら言えば、大丈夫だよ、安心して、と満面の笑みで言われた。あの、いったい何に安心すればいいんですか。

「ほら、しゃきつとして！あ、ちょっと髪乱れてる。待ってね…はい、出来た」

『お母さんか』

相変わらずのジュードに笑顔が零れる。因みにまだこの姿はアルフレドに見せていない。だから余計にドキドキしている。でもジュードたちのおかげで少しだけ自信が持てた。

「では参りましょうか、ヴェリテさん」

『うん、ローエン』

わたしには親がいないから、代わりにローエンが隣で歩いてくれる

ことになったの。

小さな教会の扉の前、そこにわたしは立っている。緊張して、きゅ、とローエンの服を掴めば、優しい笑みを向けてくれる。そしてその扉が開かれると、ふわり、とたくさんの花が舞い落ちてきた。その先に見えるのは、愛しい人の背中。バージンロードの両側にはジュードたちの姿。恐れ多くもガイアス王までが来てくれていた。あの人暇なのかしら、とか思っていない思っていない。

「さ、腕を組んで」

『は、はい!』

ぼーっとしていたわたしはローエンに促され、慌てて彼と腕を組む。そしてバージンロードをゆっくりと歩いてアルフレドの元へやって来る。振り向いた彼はいつもと雰囲気違って、ドキッ、と胸が高鳴った。

「ヴェリテ、か…?」

『ア、ルフレド…?』

いやいや、なんでお互い確認し合ってるんだ。目の前にいるのは紛れもなく彼だというのに。だってかっこいいんだもの。ほう、とお互いが見惚れていると、ローエンがわたしの腕をアルフレドの腕と絡ませた。

「お二人とも、惚けは後にして下さいね」

『ロ、ローエン…っ』

「っ…行くか」

なんとなくだけど、彼からも緊張が伝わって来ている気がする。わたしは小さく頷いて、祭壇の前まで歩く。そしてオルガンの音に合わせて、祝福の讃美歌を合唱し、続いて祭司も兼任してくれたローエンによって聖書が朗読される。最後に夫婦の教えが述べられると、ローエンはわたしたちの前に歩み寄り、まずアルフレドの方を見や

「あなたはヴェリテさんを妻とし、病めるときも、健やかなるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

思えばアルフレドを好きになるまで、いや、実際にこうなるまで結婚するなんて思わなくて、ただ彼の傍にいられたらって、ずっとそう思っていた。

「あなたはアルフレドさんを夫とし、病めるときも、健やかなるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

『はい：誓います』

人を疑い、信じなかったわたしが、あなたに出会って、恋をして、そしてこうやって結婚式を挙げている。夢のようだったけど、夢じゃない。

次に指輪交換。この指輪は、愛と真心と変わらぬ貞節の誓いであるしるし、とお互いがお互いの指に、結婚指輪を嵌めた。キラリと光るお揃いの指輪に自然と頬が緩む。そして――

「では、誓いの口付けを」

そう言われて、わたしとアルフレドは向き合う。彼はわたしの顔にかかったヴェールを取ると、少しばかり頬を染めた。

「綺麗だ、ヴェリテ」

『アルフレドこそ、今日は一段とカッコいいわ』

そ、とアルフレドはわたしに頬に手を添える。わたしを映す彼の瞳。吸い込まれそうで、愛おしい。改めて思わされる。ああ、やっぱりわたしはアルフレドを愛しているんだ、って。

「愛してる、ヴェリテ」

『わたしもよ、アルフレド』

口付けと共に、わたしたちを祝福するように教会の鐘が鳴り響いた。今、ここに一生の愛を誓う。

——ねえミラ、見てる？わたし今すっごく幸せよ。ミラが守ってくれているこの世界があるから、わたしは、わたしたちはここに存在していられる。

こそ、と、続きは夜な、と言われたのは幻聴でしょうか。いいえ、彼の含んだ笑みが幻聴ではないと物語っています。わたしは顔を真っ赤にして顔を背けた。ジュードママに後で殴ってくれるよう頼もうかしら。

「お二方とも、手を」

証書に署名をした後、ローエンに言われて手を重ねる。彼から祝福をもらった後、わたしたちは初めてみんなの方を振り返る。わたしはアルヴィンの腕に手を添えて、にっこりと笑った。

「おめでとう！！」

みんながたくさんのお祝いの言葉をくれた。すごく、すごく幸せだった。余談だけど、ブーケトスはジュードが受け取ったとか。

永遠の愛を誓おう

——今までもこれからも
ずっとあなただけを愛します——

結婚式ってこんな感じですか？↑

取り合えず流れと内容だけ教えてもらって自分なりに書いてみたんですけどぐだぐだしすぎですね、はい…

気に入ってくださいれば嬉しいです！

披露宴は…まあ書けたら書きます↑

間違っているとかなどあれば指摘してくださいませ、はい切実にm（

——）m↑

**A
r
e

y
o
u

h
a
p
p
y
?**

みんなにお祝いされて

今までにないくらい、

すごく幸せです――

結婚式が終わった後、披露宴なるものがあるということで、わたしたちはその会場に来ていた。席に座ると、ローエンから開宴の言葉があり、次いでジュードからわたしたちのプロフィール紹介があった。まあちよつとアルフレドの扱いが酷かったように思えたけど、でもそれはそれでジュードがいかにわたしたちのことを思ってくれてるのが感じられた。

次に主賓からの祝辞で、わたし方はまだ二年くらいしか一緒に仕事をしていないけど、 balanさんが、アルフレドの方は、ユルゲンスさんが色々話をしてくれた。普段聞けてない仕事の話とか、恥ずかしながら惚気話を暴露されたりして、お互い顔を真っ赤にしていた。

「お二人とも、ケーキカットですよ」

そう言われてハツとする。気付けば周りにカメラを構えたみんながいて少しビクツと肩を跳ねさす。

『じゃ、じゃあ、行きます！』

ナイフを持っていたアルフレドの手に手を添えて、わたしたちはケーキにナイフを入れた。ってかこれどこまで入れんの？と迷って彼を見やれば、ピタリ、と真ん中くらいでそれを止めた。そしてそのまましばらく写真をパシャパシャと撮られ、それが終わると何やらレイアが満面の笑みでわたしたちにフォークを差し出してきた。

「何？」

「何ってファーストバイトだよ！」

『ファ―…何？』

「知らないの？お互いがケーキを食べさせあうの！」

えっと、つまりそれは、あーん、と言う意味ですかレイアさん。分かったような表情をしていれば、それを押し付けられるわけで。

『え、ちょ、レイア！』

「ほらほら！」

早く早く、と背中を押されてケーキの元へ戻ってくる。ちら、とアルフレドを見れば、なんかめっちゃいい笑顔してるんだけど。彼はレイアからフォークをもらうと、一口サイズの大きさにケーキを切った。

「ヴェリテ」

『！ や、あの…でも、人前…っ』

「いいから」

悪戯っぽく笑うアルフレド。どうやらわたしに拒否権はないようで。顔を林檎のように真っ赤にして、わたしはおずおずと口を開ける。

「あーん」

『あ、あーん…』

恥ずかしいから目を瞑ると、むぐっ、と口の中に甘いのが広がった。しかし、口いっぱいにケーキを詰められた様で、わたしは慌てて口に手を当てる。

『っな、何するのよ!!! ってかさっき一口サイズだったじゃないの!!!』

頑張って飲み込んでそう怒鳴れば、急に近づいてくるアルフレド。そのまま口元にキスされてわたしはその場に固まった。

「ちそうさま」

どうやらクリームがついていたらしい。彼は自分の唇についたクリームを舌で舐めとり、ニヒルに笑う。

『ジュードママ』

「うん、任せてヴェリテ」

「え、ちょ、待ってって！これはほんの冗だ……——ツツツツ！！！！！！」

アルフレドの悲鳴にならない声が響く。勿論会場みんなは半眼で彼を見ていた。

『はい、あーん』

「……ヴェリテさん、なんの冗談ですか」

やっと落ち着いた頃、わたしからのファーストバイト。ギリリ、と光るナイフの切っ先ににカットしたケーキをぶっ刺して彼に差し出すわたし。それを見て口元を引き攣らせるアルフレドを余所に、わたしは満面の笑みでいる。

『え？ 仕返し』

「仕返しにもほどかあるだろ！！！俺の口の中真っ赤になっちゃうよ！？」

『わたしの案じゃなくてジュードの案だからね』

「ジュード君！？」

バツとジュードを振り向くアルフレド。冗談なのに、と言えば彼は冷や汗を垂らして苦笑する。気を取り直してわたしはフォークにケーキを乗せ、彼に差し出した。

『あーん』

笑って言えば、アルフレドは僅かに頬を染めて、ぱくつ、とケーキ

を口に入れた。なんかこっちまで恥ずかしいな、これ。

「では、お二人の幸せを願って、乾杯！」

そしてようやく乾杯。色々ところでグラス同士がぶつかり合う音が聞こえる。こんなにも祝福されて、今にも涙が出てきそうだったが、折角お化粧も直したことだし、ぐっと堪えた。

「乾杯、ヴェリテ」

『うん、乾杯』

わたしたちは改めて乾杯して、グラスに入ったワインを流し込んだ。少し苦みのある、でも甘く後味のいいそれに、おいしい、と言葉が漏れる。そう言えばワインは初めて飲む。いや、未成年なんだけどね。

「ヴェリテっ！」

食事が始まる中、真っ先にエリーがわたしの元へ来てくれた。少し髪も背も伸びて、さらに可愛くなった彼女をわたしは笑顔で迎える。

『相変わらず可愛いわ、エリー。そのピンクのドレスも素敵よ』

「そ、そんなっ…ヴェリテに綺麗さには負けます。とっても綺麗ですよ」

ああもう、エリーほんとに天使。思えば一番最初に心を開いたのがエリーだった。同じ境遇だったはずなのに、エリーはちっとも村の人たちを嫌ってなくて、そんな彼女の優しさにわたしは感謝している。

「アルヴィンは相変わらず風紀を乱しますね！」

くる、とアルフレドの方に向いた彼女は眉を潜めて言う。どうやらさっきのファーストバイトのときのことを言ってるらしい。

「こんなときくらい許せよ、エリーゼ」

「こんなときだからこそです！少しは節度を保ってください！！じやないとヴェリテに嫌われますよ」

『あはは、エリー、言うようになったわね』

「えへへ……ヴェリテ、アルヴィン、お幸せに、です」

ティポが離さなくなってからもう一年以上が経つ。旅していたころを思い出すと寂しくも思えてくるが、でもエリーの成長は心から嬉しい。親までとはいかないけど、姉として、かな。

それから今度はローエンがやって来た。

「ご結婚、本当におめでとうございます。まさかお二方の式である大役を任せていただけるなんて思ってもみませんでした」

『こっちこそ、受けてくれてありがとう、ローエン』

「助かったぜ」

「いえいえ。ジジイでもお役にたてたのなら光栄です。私はいつもお二人の幸せを願っております」

そう言ってローエンは優しげに笑った。彼は本当に素敵な大人だと思う。わたしが知る限り、どんな時も冷静で、それでいて確りと前を向いていて。二十年前のことがあったからこそなのかもしれない。次に軽やかな足取りでやってきたのはレイア。

「あーもう!! ほんとアルヴィンには勿体ないよね!!!」

「おい。来ていきなりそれかよ」

「だってわたしがもらっちゃいたいくらいだもん!」

腰に手を当てて、ふんっ、と鼻息を拭くレイアに、小さく笑いが漏れた。

『やだレイア。その気ならいつでも行くわよ』

「ヴェリテ：VV」

「冗談ってわかっててもお前らの目は本気だから怖エよ!!」

レイアはいっつも元気でわたしまで笑顔になっちゃう。こういうノリのいいところも好きだし、なんせ結構趣味もあう。姉妹ってこういう感じなのかな。

「ヴェリテ、幸せになってね！」

『ありがとう、レイア』

満面の笑みで言ってくれるレイアに、わたしも笑顔で返した。

レイアを見送った後、肩を叩かれたわたしが振り向けば、そこにはジュードがいた。

「おめでとう、ヴェリテ、アルヴィン」

「おう」

『ありがとう』

ジュードは、そうね…相変わらずお人好しだけど、でも自分のことのようにわたしたちの結婚を喜んでくれたり、結婚式の準備も手伝ってくれたみたいで、すごく感謝してる。

「ほんとに綺麗だよ、ヴェリテ」

『ジュード…』

「おいこらときめくなヴェリテ」

ジュードの柔らかい笑みにキュンとすると後ろから会えルフレドに頭を掴まれた。痛い。痛いですアルフレドさん。

「もう、アルヴィンは相変わらずなんだから！！ヴェリテ、嫌になつたらいつでもおいで」

「優等生もなんでそんなこというのかね…」

『あはは、考えとく』

「そこ否定しないのかよ！？」

慌てるアルフレドをみてわたしとジュードは顔を見合わせて笑った。

それからガイアスや、 balan さんや、ユルゲンスさん、それにドロ
ッセルも来てくれてすごく嬉しかった。一番来て欲しかった人には
来てもらえなかったけど……ほんとに、ほんとに幸せな一日だった。
たくさんお祝いしてもらえて、たくさん笑顔をもらって、わたし、
すごくS 幸せだ……

「泣くなよ、ヴェリテ……」

『うん……うん……』

溢れた涙が止まらなくて、そんなわたしの涙をそっと彼が拭ってく
れた。

「これからもっと幸せにしてやるから」

『っばか……』

頬に触れている彼の手にそっと手を重ねて小さく笑う。ああでも、
これ以上幸せになったらどうにかなっちゃいそうな気がしてきた。

A r e y o u h a p p y ?

——これから先何があっても

わたしはあなたと共にありたい——

披露宴ってこんな感じですか↑

なんか、あの、アル憫になってるようになってないようなw

取りあえずアルヴィンごめん^p^p^

ファーストバイトは暖笑からの提案(?)

ちゃんと意味があるみたいなのでやったらいい感じだと助言を頂きました……でも、うん、ごめん、なんかふざけてますね、そこ↑

次はリクエスト頂いたものを更新していけたらいいなと思ってます

^^

頑張りますね＼(^o^)/↑

間違っているとかなどあれば指摘してくださいませ、はい切実にm(

——)m

H a p p y H a l l o w e e n ! ?

お菓子くれないと

悪戯しちゃうぞ！

……されちゃった

「「トリックオアトリート!!」」

そんな楽しそうな声でわたしは目覚める。まだ重たい瞼を開けて目に入ったのは奇妙な格好をしているレイアとエリーゼ。

『いや、可愛いけど…何?』

「ヴェリテってばハロウィン知らないの!？」

わたしは頷く。聞けば地霊小節の末にある行事だとか何とか。わたしはそういうイベントに関する本は読んだことがなかったのだから無知なのだ。

「こうやって仮装して、お菓子くれないと悪戯するぞー!、って他所の家を回るんだよ」

『成る程』

レイアは魔女、エリーは小悪魔の仮装らしい。ってか久しぶりに会ってそれですか。それよりまだ辺り暗いんですけど。わたし寝たの一時間前じゃん。

「ヴェリテ、お菓子頂戴、です!」

『うーん、悪いけど持ってないのよね…』

ごそごそ、とポーチの中を漁るが飴玉ひとつない。すると二人が一斉にわたしに飛び掛かってきた。

『ぶっ!?!?』

わたしはベッドに押し倒され、ニヤニヤと笑う二人に口角を引き攣らせる。

『な、何を…』

「お菓子くれないと悪戯です!」

「だからヴェリテ、大人しく犠牲になってね!!」

『ひ…っ、うわあああああ!?!?』

——無理矢理二人に服を脱がされて、何故か包帯をぐるぐると巻き付けられた。二人曰くミイラ女ならぬ包帯女だというのが、これは些か、いや、かなりヤバいんじゃないのか。

『やだやだやだ！！こんな格好で出ていくなんていやああ！
！！！！』

わたしは引き摺られてミウたちがいる部屋へと向かっている。

「お菓子くれなかった罰です！ほら、ヴェリテっ！」

『エリー―あなたは悪魔か！！』

「小悪魔です」

『それは仮装の話でしょうが！』

いくらわたしが叫んでも二人は止まってくれなくて、結局部屋の前に来てしまったわけで。

「アルヴィンもいるよ、ヴェリテ」

『なんのイジメ！？や、ちょっ、レイアっエリーっ』

静止の言葉も聞かず、レイアとエリーは部屋の扉を開ける。そこにはジュードとローエン、そしてアルフレドがいた。ジュードは目を見開いて持っていたフォークを落とし、ローエンは髭を撫でながら笑っていて、アルフレドは顔を真っ赤にして口を開閉していた。

『っだから嫌だったのにィ!!』

バツと顔を手で隠し、わたしはみんなに背を向ける、いや、向けちゃダメだ。今のわたしは体のラインがハッキリしてるし恥ずかしい。恥ずかしいってもんじゃない。

女としての恥じよ!!こんな露出の高い服着たことない…服って言えないけど!

「帰っちゃダメです!」

「ほーら!みんな待ってたんだからっ」

『いーやーだーっ!!』

必死に壁にすがりついて抵抗する。みんなの、しかもアルフレドの前でこんな格好とか有り得ない。死んだ方がまだ。

「ちょっと、アルヴィンもなんか言っちゃってよ！」

『レイアーっっ!!』

半泣きでアルフレドを見れば、じっとわたしを見、やがて口を開く。

「ナイスレイア」

『この屑!!!!!!!!!!!!!!』

さっきまで真っ赤になってた癬になんなのあいつ。もう泣きたい。ジュードママ助けて。…とか思ってたら、ジュードママがコートをかけてくれた。

「みんな、ヴェリテをいじめちゃダメでしょ？」

その言葉にみんなは大人しくなる。わたしは嬉しくなって思わずジュードに抱きついた。

『ジュードママ!』

「ママじゃないって!! ってかヴェリテ、ダメだって!」

『!?! っ!?!』

咄嗟に自分の格好を思い出して慌てジュードから離れた。その瞬間、アルフレドに担ぎ上げられて、わたしは自室へと連れていかれる。

「あーあ、やっぱりそうなっちゃう?」

「レイアさんもエリーゼさんも、ヴェリテさんはもうご結婚なされているのですからほどほどにしなければいけませんよ?」

「でもヴェリテはあれが似合うと思ったんです!」

「ってかヴェリテ:食べられちゃう?」

「ぼ、僕の所為...?」

一瞬の出来事だったため、わたしは暫くキョトンとしていた。ハツとしたのはベッドに押し倒されてからだった。

「トリックオアトリート？」

『……………』

「Trick or Treat？」

『……………いや、発音良く言っても……………っ』

きつと今のわたしは耳まで真っ赤なんだろうなと思いつつ、彼から目を反らす。アルフレドはわたしの首筋に顔を埋めて、厭らしくそこを舐める。

『や、は…っあ、ん…っ』

ビクッ、と身体を跳ねさせると、次いで舐めた首筋に強く噛み付く

アルフレド。

『痛っ!?! な、につするの…っ』

僅かに血の臭いがした。

「……………優等生に抱きついた」

『…嫉妬?』

「悪いかよ…っ」

噛み痕を舐められ、ピリツ、と痛みが走る。彼の舌はそのまま首筋から鎖骨まで下りてくる。

『や、っちょ…っ…!』

「折角レイアたちが誘ってくれたイベントだから我慢しようと思っ
た……」

『ふあ、あ…、ひゃ…っ!?!?』

「でもあんなところ見せつけられたら我慢なんて出来ねえよ…」

『ア、ルフレ…ド……………っ』

「どうせお菓子持ってねえんだろ? なら悪戯させろよな」

ニヒルに笑う彼を拒否する術はわたしにはなくて、そのまま朝まで付き合わされました。

結局パーティーもやれずじまいで、明日に繰り越されることになった。もちろんその日はちゃんとした仮装で出席したから。

Happy Halloween!?

もうあんな格好しないから…!

(ヴェリテ、ごめん!!)

(あははジュードが謝ることじゃないから…)

(で、でも…すごく疲れてるし…)

(気にしない気にしない。それより、久しぶりに集まったんだから

パーティー楽しもう？)

(う、うん！)

イラスト描いててついでに書いたものゝpゝ
別にハロウィン夢でも何でもない気がする↑
取りあえずあんなふうになった経緯を、と思ったらいろいろと脱線
しました：

時間軸は結婚して、家も決まってから、とか？
ふたりの家にみんなが押しかけてきてー、みたいなゝゝ
でもちゃんとアルヴィンには許可を取ってたり。
相変わらずぐだぐだ夢でしたm ((m

> i 3 4 0 1 3 — 4 0 6 1 <

2 0 1 1 . 1 0 . 2 9

月詠輝夜

あなたの隣で

あなたの隣だから

わたしはいつも

笑顔でいられるんだ

広がる青空、吹き抜ける風、透き通ったエメラルドグリーンの海、
白い砂浜。どれもがわたしの好奇心を擽る。今、わたしとアルフレ
ドは休暇を取って新婚旅行、というものに来ている。ホテルの部屋
から見える景色が何とも言えないくらい美しい。そう言えば旅が終
わってから仕事があったり何かと忙しくてこんなにゆつくりした
ことは無かった。

『素敵…!』

「お、気に入ってもらえた?」

実はと言えば私の仕事にキリがつかなくて、この旅行のことはアルフレドに任せていたのだ。失礼かもしれないけど、ちょっと不安だった。でも場所とか、ホテルとか、食事のメニューとか、全部素敵で恥ずかしながら子供のようにはいしゃいでいた。

「ヴェリテの好み、もう全部把握してるからなー」

『じゃあわたしが今したいこと、当ててみてよ』

振り返ってにっと笑えば、慣れた手つきでわたしの腰に手を回して引き寄せるアルフレド。

「キス、だろ?」

『正解』

どちらからともなくキスするわたしたち。結婚したら一緒に住もう、
と言っていたのだが、わたしの仕事が意外と落ち着かず、今まで先
延ばしになっていたのだ。だからこうやって会うのも結婚式以来、
だった。

「あーもー、久しぶりにお前と二人つきりになれて幸せ……」

『ふふ、わたしもよ。ずっと仕事だったもの』

「仕事は落ち着いたのか？」

『実はまだ。でもバランスさんが行ってきていいよ、って有給休暇く
れたの……って、ここまで来てこんな話は嫌よ、アルフレド』

折角の新婚旅行だというのに仕事の話とはなんて花がないんだろう。
口を尖らせれば、甘いキスの雨が降ってくる。

「分かってるよ。さ、オヒメサマはどこへ行きたい？好きなところ連
れてってやるよ」

『ほんと！？じゃあ、まずは……—』

それから一日目と二日目は色々なお店を回った。自分の欲しいものを買ったり、ジュードたちにお土産だ、と二人で悩みながら選んだり、ちよつと休憩、と小さなカフェでお茶したり。アルフレド曰くわたしは終始笑顔だったらしい。そういう彼もずっと笑っていたんだけど。

『海行こう、アルフレドっ』

「おふっ!?!?……朝から元気だなあ。ってかお前氣イ早すぎるだろ!」

次の日には海に行く気満々で早起きし、まだ寝ているアルフレドの上にダイブした。水着の姿で。

『あ、違う違う。サイズ確認しないで買ったから試しに試着してるだけだから、すぐ脱ぐ』

「もうお前、めっちゃ似合ってるし可愛いけどそれは誘ってるようにしか見えねえからな。ちょっとは自重してください！！」

『わたしは別に嫌じゃないけど？』

こて、とアルフレドの上からベッドに落ちて、唇に人差し指を当てながら言えば、真っ赤に染まる彼の顔。そんなこと言ってるわたしもきつと真っ赤なんだろうけど。

「っほら、海行くんだろ！？さっさと着替える！」

『(弱いなあ)』

なんとなくこれがお互いの弱点だと思う。わたしから迫れば彼が弱くて、彼から迫ってくればわたしが弱い。こういうところは似た者同士、なのかな。

それから海にやって来たわたしたち。そこにあった更衣室で着替えて、先に出て待っていたアルフレドと合流する。

「……ヴェリテ。さつきと違くね？」

『ああ、あれはこの下。だってあんな肌出てるの人前で着られるわけないじゃん』

笑って言えば残念そうに肩を落とすアルフレド。部屋で着てたのはビキニだけど今はパーカーと脛辺りまであるスカートを履いている。

「来た意味ないんじゃないの？」

『わたしはアルフレドと一緒に浜辺を歩くのだけでも嬉しいんだけどな』

「っ……お前には敵わねえよ」

苦笑いをして頭を撫でてくれる彼。今日は休みだからか、浜辺は昨日より賑やかだった。緩やかに揺れる海を見ながら、手を繋いでわたしたちは浜辺を歩く。吹く風がわたしの髪や頬を撫でて気持ちがいい。

「海、ヴェリテの瞳見たいだ」

『わたしの、目?』

「ああ。透き通っていて、それでいて綺麗な…でもエメラルドグリーンより淡い色……翡翠色、って言ったらいいか。その色、凄く好きだ」

トクン、と胸が鳴る。酷く優しい、わたしを見つめる彼の鳶色に引き込まれそうになる。そんな風にちゃんと瞳を褒められたのは初めてでなんだか不思議な気持ちだった。

「うん、俺、やっぱりこっちのが好きだわ」

『っえ…?』

「俺が攻めてヴェリテが真っ赤になる方」

アルフレドはピタリと足を止めてわたしを引き寄せる。幸い話してるうちに人気のない岩場まで来ていたのでわたしはそれを受け入れた。もぞ、と彼の胸にすり寄り、背中に手を回す。

『…ばか』

「朝の仕返し」

『…好き』

「知ってる」

チク、と首筋が痛んだと思えばキスマークをつけられていて、わたしはさらに真っ赤になった。

勿論新婚旅行で、同じ部屋に泊まってるため、その、夜の営みと言うのもありまして、四日目はぐったりとしてたわたしであった。今度から攻める時は気を付けないといけないと反省。でもこの一日はこれからのことについて色々話し合うことが出来た。この旅行が終わったら本格的に引っ越しを済ませようと話したり、家具とか生活用品も揃えなきゃね、と笑ったり、時にはちよっとラブラブしたり。結構有意義な一日になった。

五日目はホテル主催のダンスパーティーがあるということで、是非参加してほしい、と殆ど未経験のアルフレドと朝から練習したりし

ていた。貴族だったアルフレドも少しは嗜んでると思ったのだが、二十年も前の話だ。

「覚えてねーよ…ってかほんとにダンスパーティー出んのか？」

『勿論！はい、続きね』

「はいはい、姫様の仰せのままに」

何だかんだ言いながらも飲み込みの早いアルフレドに感心する。ちよつと悔しかったから難易度の高い課題を、ひとりでやって、と彼に出した。

「え、むずっ！！……………これ、ヴェリテは踊れんのかよ」

『ええ。自分が出来ないものを課題として出すわけなくてよ』

見ててね、とわたしは出した課題を難なく踊って見せる。踊りは昔からの趣味だったから色んな本を見て独学だけど大体はマスターしていたりする。自分の口でリズムを刻みながら、全部踊りきった。

「はー：趣味でやってた割にプロ並みなんじゃねえって思うわ、ほんと」

『過大評価しすぎ。じゃ、次はアルフレドね』

「一気には無理だぞ」

『わかってるわかってる』

それから数時間、間違っているところは多々あったがなんとか最後まで通せたアルフレド。どうだ、と自信にいう彼が可愛くて小さく笑った。

「なんだよ」

『ううん、なんでも』

「：ちよつと休憩！お前といちゃいちゃしたい」

がぼつ、とベッドに座っていたところを押し倒されるわたし。ちよつとびっくりした。

「お前、ムカついたからあんな課題出したんだろ」

『おお、バレた』

「素直だな、おい。まあそんな素直なところも好きだけど」

言いながら厭らしい手つきで腰を撫でてくるアルフレドに一発肘打ちを食らわせた。見事顎にクリーンヒットして彼はわたしの隣で悶える。そんなつもりじゃなかったのに、偶然って怖い。

「酷くねえ？」

『あはは…』

それからもう暫く練習して、夜まではホテルの中を見回ったり、散歩に行ったりして時間を潰した。パーティは七時から。わたしはホテルから貸し出されているドレスに着替えて、長い髪は邪魔にならないように上で纏め、普段はしないお化粧も少しばかりする。首にはしっかりと彼にもらったネックレスをつけて準備を終わらせた。

「ヴェリテ」

『あ、アルフレドも終わっ…た、っ！』

振り向けば正装したアルフレドの姿があって胸が高鳴る。普段は固めている髪も今は下ろしていて、着ている黒を基準とした服もたくさん細かい装飾がついてあって自然と彼の雰囲気合っている。こういう格好もやっぱり似合う。ってか似合いすぎ。

『カッコイイ…』

「っ…おう…お前も、すっげー綺麗…」

『あ、りがと……』

なんだか恥ずかしくて顔を合わせられなかった。けどそろそろ時間だからそんなこと言ってる場合じゃなくて。

「行くか」

『うん』

わたしはアルフレドと共にホテルのホールに来る。あまり大きいと

は言えないそこには豪華な食事や飾りつけ、煌びやかな人たちがいた。ちよつと場違いじゃないかなと思っただけ、大丈夫、と彼が手を引いてくれて安心する。そして曲が始まると、次々にダンスを始める人たち。そんな中、彼がわたしに向き直り、その場に軽く跪く。

「姫、お相手願えますか？」

『！
はい』

差し出された手に、自分の手を重ねた。

練習した甲斐あってか、わたしたちは息の合ったダンスをする。そしていつの間にかみんなから注目されて、思わず足を止めそうになったが、彼がリードしてくれた。

「このまま踊ろうぜ」

『え、でも…』

「いいから」

パーティー客が輪を描き、わたしたちはその中心でワルツを踊る。こんなこと滅多にないから恥ずかしかったけど、でもアルフレドと一緒にならなんとかなる気がしてそのまま踊り続けた。

やがて曲が終われば拍手の嵐が巻き起こり、びっくりしながらもわたしとアルフレドは顔を見合わせて笑った。なんだかちょっと幸せな気分。

——最終日は特にやりたいこともなく、部屋で一緒に過ごすことにした。でも時折何度か言葉を交わすだけ。彼の傍にいただけで凄く暖かいから、それだけで十分だった。アルフレドもそれを分かってくれているから、わたしは自然と笑えるわけで。

明日からは引っ越しの準備しなきゃな、と思いながら隣の彼を見れば、規則正しい寝息を立てて寝ていた。なんだかわたしも眠くなってきた、彼の肩に頭を預けて眠った。

あなたの隣で

わたしは笑う――

新婚、旅行…？↑

どんなものかよく分からなかったから、取り敢えず楽しかったらいいや、とガサガサ深夜に書きました（＾p＾）

まあ毎回のごとくベタベタなんどすけどねっww
旅行先は、まあどっかのリゾート地でいいです↑

エメラルドグリーンの海とかダンスパーティーとか妄想乙ですね！
でも書いてて楽しかったですし、いいですよ、ね？↑

わたしが書くふたりってラブラブなんですかね…

ラブラブ目指してるんですけど脱線しかけじゃないですかね、肘打ちとか（・ω・）

あ、ちゃんと家は決まってるんですよ、なかなか引っ越し出来ないだけ↑

…なんかもうこの旅行現代風みたくなってる↑

一応、リーゼ・マクシア、ですから

因みにエレンピオスとは合体？してたらいいと思うんです

シンフォニアみたくなえ^^

オチは相変わらずないです↑

次は何書こうかな（＾p＾）

あ、前話にイラストupしておきました（＊ノωノ）

2011. 11. 01

月詠輝夜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119x/>

交わる無限の愛色世界～テイルズオブエクシリア～

2011年11月2日14時12分発行